



# のいる風景

## 濱田 亜紀子 さん



【はまだ あきこ さん】北光  
 ●幼少期から兄と二人だけで鹿児島県の親戚の家に行くなど、旅をすることに慣れていた。美容系の専門学校を卒業後、東京の外資系企業に勤め、海外への興味を次第に強める。

### 見

「たこともない外国の景色や文化などを自分の目で確かめないと気が済まなかった」。

そう語る濱田さんは、平成25年2月から約1年半の間に、アジアのミンヤンマーに始まり中東、ヨーロッパ、アフリカ、中南米そしてアメリカの約50か国を旅してきました。

「幼少期から、目標を決めるとそれを達成するために行動し続けてしまう性格でした。東京で外資系の企業に勤めていたこともあり、海外のお客様と接する機会が多かったので、自然と海外への興味を持ち始めました。『自分の人生の引き出しを増やしたい』その思いから仕事を辞め、世界を旅する決意を固めました」と語ります。

旅では、リュック2つを抱え、その重さは40kgを超えたそうです。宿泊のほとんどは、料金が安いゲストハウスを利用しました。「そこに泊まるいろいろな国の方と現地を一緒に見て回

### 目標を持ち、行動し続ける

### じとが何より楽しい

り、食事も作ったりして、仲良くなりました」と笑みを浮かべます。

「全ての国の数字とあいさつを、入国前に必ず覚えめました。数字はお釣りなどでだまされないため、あいさつは現地の人とコミュニケーションをとるためです。実際に現地の言葉であいさつをすると、現地の人は喜び、よく食事に誘ってもらえました」と旅の様子を語ります。

「アフリカのタンザニアでは、外で銃声が聞こえ、イスラエルでは出国時の検査で別室に連れて行かれ身体検査を受けましたが、全ての経験が私にとって財産です」とトラブルにも動じる様子は見せません。

そんな濱田さんは、「最も印象に残る国はインド」と話してくれました。「インドでは、老人施設で配給や洗濯などを手伝わせてもらいました。また、孤児院では子どもたちに、算数を教えてあげましたが、インドの

算数はレベルが高く、私は計算するのに電卓を使っていました。インド滞在中に5月5日を迎え、日本では『子どもの日』なので、折り紙でしゅりけんや鶴を折ってあげると、子どもたちは、ものすごく嬉しそうでした。インドの方は、気さくな方ばかりで、多くのつながりを持つことができました」と笑顔で話します。

「勉強やスポーツなどで何か目標を持てば、それを達成するための行動につながります。どうすれば目標を達成することができるかを考えることが楽しいです。失敗を恐れて、一步を踏み出せない方もいると思いますが、勇気を持ってぜひ行動してみてください。そして、行動し続けてほしいです。私も、次の目標達成に向けて行動し続けます」と濱田さん。世界を旅する目標を達成した今、濱田さんの次なる目標は、「海外で美容関係のお店を開くこと」と力強く答えてくれました。